

Book Review

呼吸機能検査の苦手意識をなくす本 エキスパートから学ぶ知識とコツ

鈴木範孝 編著



この本は「どうしたら呼吸機能検査の苦手意識をなくせるか」を出発点に編まれている。呼吸機能検査は難しい。呼吸機能検査の正確な結果を得るには、「吸って吐いて」に困難感をもっている呼吸器疾患患者さんの頑張りが必要である。本書は「その頑張りを引き出すための技術を伝授する、呼吸機能検査の難しさを克服しよう」がコンセプトになっている。特に、2章は呼吸機能検査の基礎知識とともに患者対応技術を学べる内容となっている。

苦手意識は「わからない」というネガティブな感情から生まれてくる。呼吸機能検査を実施するうえでの最低ラインは、フローボリューム曲線の測定である。測定した結果を理解するためには、換気力学的知識が必要になる。換気力学から呼吸機能検査を説明する際の「気道抵抗」や「コンプライアンス」といった用語にとっつきにくさを覚え、「わからない」と感じるのではないだろうか。この「わからない」という苦手意識を払拭するため、呼吸生理学、疾患ごとの病態、専門用語と測定機器を解説したのが1章である。単元のポイントを簡潔にまとめ、途中には多くのコラムが散りばめられ、わかりやすくなるよう、さまざまな工夫が凝らされている。まず、2章と3章で呼吸機能検査の実践方法を学んだ後に1章に戻り、その理論や背景、知識を学ぶ、そんな読み方をしてもよいと思う。

編著者の鈴木先生は「呼吸機能検査は呼吸機能障害をもっている患者さんの生理学的情報を

いろいろと教えてくれる魅力的な検査だととらえてほしい」とおっしゃっている。肺活量を測定してその値が減少(拘束性換気障害)していれば、その患者さんは肺の外側の胸膜が硬くなっていて肺が膨らんでいない(たとえば肺線維症、間質性肺炎)、あるいは肺の一部が切除されていて空気が入る容積が減っている(たとえば肺葉切除後)と推定されうる。呼吸機能検査で正しく推測できた臨床情報は、診断や治療方針の決定に大きく寄与する。

鈴木先生は千葉県房総半島の4分の1を医療圏とし、地域医療ネットワークの要となる広域基幹型急性期病院である国保旭中央病院に長く勤務され、臨床検査技師として精度の高い医療の実践と後進の育成に尽力されてきた。医療過疎の近隣地域が広くあり、必ずしも教育環境が整っていない場所で働く医療者の苦勞を知るだけに、励ましと愛情をもって、みずから会得した知識と技術—「経験知」をすべて伝えようとする熱意をおもいだ。わかりやすさを最優先に、しかし、生理学をベースとして呼吸機能を誠実に解明している。「確実に基礎をおさえたうえで、呼吸機能検査の実践を楽しく魅力的に！」この本を手にとれば、その想いが皆さんに届くと思う。

(千葉大学 医学部 呼吸器内科 特任教授
巽 浩一郎)

<B5判/184頁/定価6,380円(本体5,800円+税)/医書堂出版/2024>